

2019年2月10日

～毎月10日は人権を考える日～

私たちには 生きる意味があるのよ

昨年9月に、樹木希林さんが亡くなったとき、最後の主演作「あん」を再度見ました。どら焼き屋で働く高齢のハンセン病療養所入所者を樹木さんが演じています。「どんな風に吹かれて小豆がここまでやってきたのか、旅の話聞いてあげるの」。主人公の徳江さんは、小豆の言葉に耳を澄ましながらいきいきと愛おしそうにあんを炊いていきます。あんのおいしさが評判となり、店は繁盛します。

しかし、世間の無理解に押しつぶされて店を去っていった徳江さん。

どら焼き屋の店長さんと常連客の中学生の女の子は、徳江さんに会いに療養所へ向かいます。バスに揺られて二人が到着した場所は、深い緑に覆われた静かなところでした。二人の訪問を喜びながらも、語ってくれる思い出話は、哀しいものでした。「入所するとき、母が徹夜で縫ってくれた服。初めて着る新しい服を到着したその日にすべて燃やされてしまったの」。

二度目に訪問した時には、徳江さんはもういませんでした。三日前に肺炎で亡くなっていたのです。呆然とする二人にポータブルプレイヤーが差し出されました。そこから聞こえるのは、「せっかく授かった子どもを墮ろさなくてはいけなかったこと。もしも生きていたら、店長さんと似た年頃だった。」という、徳江さんの言葉でした。

私たちに、人間としてよりよく生きる意味を伝えてくださっている本田久夫さんや磯野常二さんの姿とも重なって、涙を流しながら何度も見てしまう映画です。甘く優しい空気に包まれながら、生きていくことの強さを感じます。声高に「感動するでしょう」と押し付けてくるような作品ではないのに、穏やかな流れの中で、自然とハンセン病のことや差別、そして、日本人のもつ優しさと強さと残酷さについて考えてしまう映画です。

「私たちは、この世を見るために、聞くために、生まれてきた。だとすれば、何かになれなくても、私たちには、生きる意味があるのよ」。今でも、樹木さんのセリフが、心の中を吹きわたっています。

西条市教育委員会

西条市人権教育協議会